

誰がカインを殺したか

(いつたいどうして、こんなことになってしまったんだろう……)

まるで悪夢だ、と俺は胸の中で続け、しかしその思いを反射的に、

(陳腐だ！)

と打ち消した。どこかで聞いたような紋切り型のことば遣いほど、父が侮蔑するものもなかつた。ことばだけでなく日常の趣味嗜好も、無論仕事に関しても、口から洩らす些細な一言半句に至るまで、出来合いの慣用句や紋切り型の表現はことごとく退けられた。それが小学校に上がる歳から、息子たちに父が与えた教育だった。

自分ひとりだったら、とつくに嫌気が差して逃げ出していたかも知れない。だが、俺には弟がいた。一歳しか歳の違わない、しかし顔形も身体つきも好き嫌いもすべてが対照的で、似ているところより相違するところの方が遥かに多い弟。それが物心ついて以来の、父の寵を争う競争相手だった。

その弟は、もういない。目の前で、頭から血を流して死んでいる。鑿を入れかけた大理石の塊がそばに転がり、その表面には俺の手痕がくつきりと血で描き出されている。俺が殺した。この手で殴り殺した。そのことは疑いようがない。ただ、どうしてそんなことをしてしまったのが、はつきりしない。

(どうしてですか、父さん。なんで俺はこんなことを?)

床に膝をつき、髪を掻きむしり、あるいは拳に握った手で胸を打ち叩きながら、訊けるものなら訊きたい。だがそんな愚劣な問いに、あの父が答えるはずがなかった。父は愚か者を愛さない。行く道を邪魔する弱き者を赦さない。たとえ血を分けた我が子であっても、彼の王国に無能力者の座る椅子はないのだ。

俺たちの父、建築家 橘 霽。

戦後日本の建築界にあって、その名は塔のように屹立する孤高の天才だった。仰ぐべき師を持たず、いかなる派閥にも属さず、徒党も組まず、日本よりはヨーロッパや中東でまづ注目を集め、いくつかの賞を勝ち取り、逆輸入される形でようやく国内でも広く知られるようになった。彼の名を知らぬ者も、その異様にモニュメンタルな時代を超越した作品を、一度でも目にすれば記憶に留めずにはおれないだろう。

その父を助けて働くことは俺にとって紛れもない喜びであり、誇りであり、そのことに微塵も疑いを抱いたことはなかった。それは弟にしても同じだったはずだ。ふたりは競い合うことで互いを高め合い、父と三人のユニットとしてより良い成果を生み出してきた。だがいくら実の息子とはいえ、凡人の身で紛れもない天才に仕えるのは楽な話ではない。口に出してそういうことはなかったが、弟がいなければここまで来れなかった。俺たち兄弟はライヴァルである以上に、苦楽をともにする戦友だった。互いの労苦を理解できるのもふたりだけだった。

父のふたりの妻、俺たちの産みの母と末の弟を産んだ後妻は、どちらも家を出ている。それも不思議ではない。一度は愛情を持って結びついても、父という赫奕たる太陽の、日常の悴には収まり切らぬオーラに晒されて消耗し、ついには耐えきれなくなったに決まっている。だが、夫婦は他人になれるが親子の縁は切れない。俺たちは逃げられなかったし、逃げる気もなかった。そうだと。決して弟を憎んでなどいなかった。

(それなのに、俺のしてしまったことは——)

夢などではない。これは現実だ。寒さの中で身体は痺れ、あたりは暗く昼とも夜ともつかず、その瞬間からどれほどの時間が流れたかも定かではないが、脳の芯は残酷なまでに醒めている。そして俺の指には、紛れもない弟の血がこびりついている。俺は殺人者だ。そのことを否定するわけにはいかない。だがどうして俺は弟を殺したのか、いくら考えてもわからない。

「本当は憎かったんでしょ？」

声が出た。がさがさと不快にかすれしわがれた老婆の声だ。いつの頃からか、父の家に住み着いて身の回りの世話をしているという、家政婦。俺たちの前に顔を出すようになったのはほんの一年ばかり前からだが、白髪頭を乱した気味の悪い鬼婆のような女だ。雇うならもう少しましな人間をと幾度も勧めたが、なぜか父は聞き入れなかった。

「仕方ないわ、将さん、それは。なんといつても征さんの方がずうっとお父様に買われていたもの、あなた妬ましかったんでしょ？」

若い女のようなしやべり方の、しやがれているくせに妙にねちっこい、ねばねばと耳に這いこんでくる声。ひどく馴れ馴れしいことばつきは、そんなことはあるわけがないが、古くからの知り合いだともいうようだ。俺は両手で耳を塞ぎ、頭を振る。違う。俺は弟に嫉妬したことなどない。

「それにあなたたちがふたりしてお付き合っていた女の方だって、征さんの方をずっと好いていたそうじゃない。無理に認める必要はないわよ。あなたの本当の気持ちは、あなたがしてしまったことではつきりしているんだから。表向きでは否定しても、あなた、心の底では征さんを妬んで憎んでいたのよ。そうでなかったら殺すわけがない」

止めてくれ、と大声でわめいたつもりだったが、声は俺の口からは出ていなかった。う。ここには誰もいない。死んだ弟と、俺の他には。女の声は幻聴だ。あるのは空虚な闇と静寂、そののみ。

「ねえ将さん、いまあなたどんな顔してるかわかる？ 情けない、情けない、叱られて家から放り出されて、泣きべそを搔いている子供の顔よ。それじゃきつとお父様がつかりなさるわ。自分の息子だとは思えないっていわれるわねえ」

足元に目をやると、濡れた黒石の表面が鏡となつて、そこに自分の顔が逆しまに映し出されていた。女の声が嘲笑つたそのままの、情けなくゆがんだ顔。あの鬼婆がいう通りだ。こんな俺を父は愛さない。俺はもう、父のために働くことは出来ない。それならば、俺はこれからどうすればいい？

すると――

どこからか、鐘を鳴らすような音が聞こえてきた。

いや、キリスト教会の鐘ベルとも仏教寺院の梵鐘ぼんしやうとも異なる、あえかな、そして玄妙な音色いろののだが、どんなことばを使えばその響きを、まだ聞いたことのない人間に伝えられるのか。それは水琴窟すいこんくつの鳴る音だ。水滴がしたたり、水面に落ちる。その微かな音が閉ざされた空間の空気を振動させ、反響する。わずかな光さえあれば水滴は水晶の珠たまのように輝き、水面に広がる波紋もまたまばゆく輝くだろう。しかし、光はない。地中に埋められた瓶かめの中でこだまするのが水琴窟の音だからだ。

濡れた闇の音。あわあわと、さびさびと、聞く者の魂を異界に誘いざなう音。

建築家橘憲は水琴窟を愛した。それは彼の作品に、さまざまに形を変えながら現れるモチーフのひとつだ。決して大げさなものではない。中庭に据えられた、女の両手を合わせたほどの水盤、サンルームの壁泉へきせん、色ガラスの光にきらめく屋内噴水、そしてひそやかに仕掛けられた水琴窟。それら小さな水仕掛けは、ロマネスクの修道院や城塞を引き合いに出される橘の建築の厳いかめしく荒々しいポリウムに、一点の愛らしい魅惑を添えていた。子供時代のほとんどを欧州で過ごしたという父だったが、生家は京都だという。日本庭園の付属物である水琴窟に、なにか格別な記憶があったとしても不思議はないとは思っていたが、父がそれについてなにか書き記したことも、ましてや息子たちに向かつて幼時の思い出を口にしたこともない。

ポケットには携帯電話がある。父に電話しようか。自分の犯した罪を告白し、懺悔し、別れを告げる。永遠の別れを。当然ではないか。この手で弟を殺してしまったのだ。このまま生きてはいられない。しかし、断じて自首はしない。兄の身で、より父に愛され認められた弟を妬んで、殺した。息子が犯したみじめで醜悪な罪で、天才橘寔の名に泥を塗ることなど出来るものか。それくらいなら弟の死骸をどこかに埋めて、自害する。容易には見つけれぬ、否、断じて発見されぬ場所。ならば、表面的にはふたりの失踪があるだけだ。疑いは持たれるとしても、決定的な事実とはならない。真相は謎のまま葬り去られる。そうしよう。それなら赦してくれますか、俺の罪を。父さん。

取り出した電話は、見ればもうバッテリーが切れかけている。ここに來てから、そんなに時間が経っていたのだろうか。周りを見回して、また笑い出しそうになった。いつの間にか目の前には、輪になったロープが垂れていたから。誰だか知らないが、ご親切なことだ。それともこのロープを用意したのは、俺自身だったろうか。

「いいじゃない、どっちだって」

甲高い女の声が笑う。幻聴が戻ってきた。声は違うがこんなふうには、遠慮会釈もない口の利き方をする女がいたな。ふとそんなことを考える。橘寔の名前さえ平気で冗談の種類にして、俺たちがどぎまぎするのを見てまた笑った。俺はあの女が好きだった。たぶん弟も同じように。家族の真似事のようなことをしたときもあった。俺と弟、どっちが彼女に気に入られているか競って。あれはいつのことだ？ 女の名前はなんといった？

「なにしてるの。早く死になさい」

思い出した。名前は、ミチだ。でもミチっていうのは、俺たちの母親の名前だ。いや、もうひとりいただろう。ふたりともいつの間にか消えてしまった。そうさ、消えたんだ。どこにもいない。いい女だった。あの鬼婆とは大違いの。なんだって？ 後ろ姿が？ はは。馬鹿だなあ、征。まさかそんなわけはない。

「——なにも、知らないくせに」

ああ、俺はなにも知らないだろう、きつと。だがいまとなつてはどうでもいい。死ぬしかないんだから。ねえ、父さん。俺たちが消えた後、あなたはどうするのか。あなたの名で受注した仕事、スケッチやエスキスの状態で止まっているプランは、いまも片手の指に余るのに、弟の撰おさむはまだ十六だ。俺たちの代わりになるには時間がかかる。

そこまで考えて、遺言をするなら父よりも弟にだ、と思った。俺たちの物語はここで終わる。だがふたりでようやく背負おってきた重荷を、末弟に丸ごと負わせてしまうことになるのだから、せめて詫わびのことばくらい残してもいい。俺は右手で携帯を操作しながら、左手で無造作にロープの輪を頭にかけた。だが、そのとき。

俺に天啓が訪れたのだ。

俺たちの物語。それは旧約聖書の創世記第四章、カインのアベル殺しだ。

しかし、それが文字通りの意味だったとしたら。そして、そうだ。もしかしてその先に第二幕があつたとしたら。あれは、あのエピソードは何章だった？ ——